

乳児はいつ遊んでいるのか： 乳児保育における遊びの深まる時間帯の検証

黒木 晶*・坂田 和子**

When do infants play? : Verification of the time when the play deepen in infant childcare

Aki KUROGI and Kazuko SAKATA

概要

本研究は、乳児の遊び時間において午前と午後での遊びの実態を明らかにすることを目的とした。保育所0歳児クラスで、乳児の遊びについて午前と午後に観察調査を行った結果、午前午後ともに乳児は、自らが興味ある遊具に触れ、探索を行っていることが明らかになった。また、保育という集団ではあるものの、乳児一人ひとりの生活リズムがあり、遊んでいる乳児がいる時間帯に食事や睡眠している乳児がおり、遊びが深まる時間帯は乳児それぞれにあることが示された。加えて乳児はそれぞれの生理的欲求が満たされることで、遊びに向かうことができることや、保育士を基点にして遊びに向かっていることが示唆された。

キーワード：乳児、遊び、生理的欲求

問題

近年、都市化や少子化、核家族化等で労働形態や家族機能は変容し、共働き家庭の増加などが要因の一つとなり、保育所保育ニーズが高まっている。

保育所は、家庭との緊密な連携を下に、養護と教育を一体的に行う役割がある。養護は、「生命の保持」と「情緒の安定」を図ることとされ、「生命の保持」には、生理的欲求が満たされることや清潔で安全な環境を整える内容が含まれている（厚生労働省，2008）。また、「情緒の安定」は、一人一人の子どもの気持ちを受容し、子どもとの継続的な信頼関係を作ることや一人一人の生活リズム等に応じ適切な食事や休息をとれるようにする内容が含まれる（厚生労働省，2008）。3歳未満児の保育では特に、食事、排泄、睡眠等の基本的な生活習慣について一人ひとりの状態に応じることや、基本的信頼感を築くこと、安全面に気を配ることが重要とされている。

乳児は、愛着関係にある特定の大人の存在を安心できる場所とし、そこを基点にして探索活動を行う（江尻，2008）。つまり、生理的欲求充足、特定の大人との愛着関係があることで乳児は遊びに向かう。子どもにとっての遊びは興味関心から始まる自発的で自由な活動、それ自体が喜びや楽しさを伴う活動、乳幼児期の生活にふさわしい多様な生活経験を通して心身の調和のとれた発達

を促す活動である（中野，2016）。生理的欲求充足を重要とする乳児が一日の保育所生活の中でどの時間帯に遊んでいるのか、また遊びが深まる時間があるのかどうか検討の余地がある。

乳児保育の研究では、観察時間について、午前、午後、一日を対象としたものがある。伊藤・西・宗高（2017）は、0歳児クラスの遊び環境と保育者のかかわりについて年間を通した観察を行っている。観察は、午前中に行い、観察によってみられた具体的な実践例を取り上げている。伊藤ら（2017）によると、保育者は、年間を通してクラス内に常設する遊具と子どもの発達に応じて加える遊具、また配置を変える等の工夫をし、発達が違ってもそれぞれの子どもの応じた遊び方ができるように考慮している。

乳児保育室の空間構成に注目した村上・汐見・志村・松永・保坂・富山（2008）は、単一空間の保育室をコーナー（畳、じゅうたん、静的休息型ブース、動的遊戯型ブース、フローリング）からなる部屋へ構成した時の子どもの行動を観察している。観察は、自由遊びの時間（15時から16時30分）に行い、保育室の環境を変化させたことで、新たな子どもの行為が引き出されたことを明らかにしている。つまり、保育室内にどのようなものを置き構成しているかで、子どもの行為の多様性が異なり、環境から子どもの行為が引き出されているのである。また、村上ら（2008）は、子どもの活動空間と保育士の

* 福岡女学院大学大学院

** 福岡女学院大学

活動空間が関係していることも明らかにしている。これは、子どもが保育者のいる場所を安心できる場所として捉え、保育者を基点に活動していることを示唆している。子どもは、情緒の安定を図る保育者がいるからこそ、安心して保育者のもとから遊具へと意識がむかい、遊ぶことができる。

一日を通して乳児の姿を捉えている研究としては、根ヶ山・星・土屋・松永・汐見(2005)の0歳児クラスの乳児の泣きについて調査したものがある。その調査では乳児の泣きの生起時間や行動の特徴、考えられる要因について、一日を通した保育士の記録をもとに検討し、泣きが午前中に多発し、午後には減少する傾向があることを明らかにしている。また、乳児の泣きを生理的理由によるものと保育士が捉えた中で、空腹による泣きは10時台がピークであり、甘えによる泣きは保護者との分離時間である午前の早い時間帯に、眠気によるものは午前中一貫して多いことを明らかにしている。このように、泣きの生起時間や、泣きの種類について明らかにするためには、一日の一部分を切り取るのではなく、一日を通してみる必要がある。

根ヶ山ら(2005)と同じく一日を通して乳児に関する調査をした近藤・定行(2012)は、一年を通した0歳児の発達と保育室の使われ方に着目し、月1回、午前9時から午後5時までの午睡時間以外の時間帯に観察を行っている。調査の際、乳児の発達段階を、主な移動を歩行で行う段階の「歩行児」、ほふくで行う段階の「ほふく児」、移動しない段階の「ほふく前児」と移動方法により分類し、0歳児保育室には「歩行児」「ほふく児」「ほふく前児」が混在していることを明らかにしている。年間を通して、「歩行児」「ほふく児」「ほふく前児」、もしくは「歩行児」「ほふく児」が混在している(近藤ら, 2012)。さらに、ほふく児のほふく姿勢は、主にずり這い、四つ這い、高這い等に分類され、歩行獲得に至るまでにそのいずれかのほふくを経験している場合が多い(カルマール, 2017)。このように、0歳児保育室には、様々な姿勢で移動を行っている子どもがおり、個々の運動発達に合わせた空間の保障が必要とされる。

保育所での生活には、登園から降園まで一日の大きな流れがある。乳児の生活リズムは、月齢が低いほど個々により違いがあり、食事、排泄、睡眠時間を考慮して保育を行うことになる。乳児保育室では、食事、排泄、睡眠、着脱等の基本的な生活習慣を基盤として遊びが展開され、登園後から昼食前まで、おやつ後から降園までの時間帯が遊びの時間となる場合が多い。月齢幅があり運動発達や生活リズムに違いのある様々な子ども達が過ごしている乳児保育室では、個々の生活リズムに合わせた保育の中で、乳児それぞれに遊びの深まる時間帯があると予想される。

本研究では、乳児の遊びに視点を置き、午前と午後の乳児の遊びの実態を明らかにすることを目的とする。

方法

調査時期：2017年2月下旬～3月上旬の4日間

午前(9時30分から10時30分)、午後(15時30分から16時30分)

対象児：A保育所 0歳児クラス 低月齢クラス7名(9か月～1歳4か月、平均1歳1か月)7名中1名は、3月からの新入園児であり、入所したばかりで保育所の生活に慣れていないため、分析対象から外した。

手続き：0歳児室の隅にビデオカメラを設置し、撮影した。ビデオカメラは、部屋全体が映る角度で、子どもの手の届かない棚(高さ91.5cm)の上に三脚(高さ51.5cm)を用いて設置した。

クラスの状況や子どもの健康状態等については、保育士から情報を得て把握した。また、A保育所0歳児クラスの日課を表1に示した。

表1 A保育所0歳児クラスの日課

時間	内容
7:00-	順次登園
9:00-9:30	おやつ
9:30-10:30	活動
10:30-	順次昼食、午睡
15:00-	順次おやつ
15:30-	活動
17:00-	順次降園

結果

まず、クラスの状況として、午前中は、月齢や個人の様子に合わせて午前睡をしている乳児がいれば遊んでいる乳児もいた。食事は、個々の生活リズムに合わせた時間にしており、同時帯に食事をしている乳児、遊んでいる乳児が混在していた。午睡からの起床時間、おやつ時間も個々に合わせた時間になっていた。体調面等で泣いている子どもの姿もあったが、情緒が安定すると遊び出していた(表2)。

表2 情緒が安定し遊びに向かうA児（例）

体調不良で機嫌があまりよくない様子のA児は、朝のおやつ後に保育士に抱かれて、遊びスペースへ移動した。しばらく保育士の膝の上に座り、保育士と一緒に絵本をみる時間を過ごした。その後、自分で保育士の膝からおりて遊びに向かうが、友だちが自分の体に触れたことで泣き出した。保育士が抱っこをし、A児の気持ちを受け止めた後、容器の中にチェーンを入れる遊びに誘うと、A児は再び自分で保育士の膝からおりて遊びに向かった。その後、友達が近づくことや保育士がA児のそばを離れる等で何度か泣き出すことがあったが、その度に保育士がA児の気持ちを受け止め、A児は自分のタイミングで興味のある遊びへ向かった。

子どもの移動手段は四つ這い、高這い、つたい歩き、二足歩行と月齢により様々であるが、使っているものや高さに合わせて姿勢変換し、探索していた。

子ども達の遊びについては、午前中と午後での遊びを分けて整理した（表3、表4）。午前中、午後ともに、ものをなめる、つかむ、投げる、引っ張る、振るなどの行為や、容器にチェーンやビーズ棒を入れたり出したりする遊び、絵本をみる、保育士とのふれあい遊びをしていた。また、おもちゃを渡す、受け取るという友達とのやりとり、食べる真似やバッグを持って出かける等の再現遊び、押し箱を押すなどの運動遊びをしていた。

表3 午前中の遊び

- ・カップ、ビーズ棒、チェーン、筒、積み木、ミルク缶、ペットボトル等のものをなめる、つかむ、投げる、振る
- ・かごやミルク缶、穴あき容器、ボウル等の容器にチェーンやビーズ棒、お手玉等を入れる、出す、容器の中をのぞく
- ・太い筒に細い筒を通す
- ・ペットボトルを打ち鳴らす
- ・壁面遊具のホースの中にチェーンを落とし入れる、壁面遊具のひもを引っ張る
- ・押し箱や手押し車を押す、引く、押して進む
- ・粗大の段差・斜面をのぼりおりする
- ・ミルク缶を転がす
- ・箱の中に入る、箱の中のボールをとり出す
- ・サークルに入る、出る
- ・笛を吹く
- ・保育士と絵本をみる、絵本の絵に注目し、指さす、絵本を広げる
- ・布を上下に揺らす・顔を隠す
- ・保育士とふれあい遊びやいないいないばあをする
- ・保育士や友達とものを渡す、受け取るのやりとりをする
- ・プラスチック容器を口に近づけ、飲む真似をする
- ・バッグを手を提げてバイバイする、バッグの中をのぞく
- ・遊び用の服を指さして着たいことを伝え、保育士に手伝ってもらって着る

表4 午後の遊び

- ・カップ、ビーズ棒、チェーン、積み木、タッパー、筒等のものをなめる、つかむ、投げる、振る
- ・ミルク缶、穴あき容器、ボウル、タッパー等の容器にチェーンやビーズ棒、お手玉等を入れる、出す、容器の中をのぞく
- ・タッパー容器を頭にかぶる、床に打ちつける
- ・太い筒の中に細い筒を通す
- ・積み木、ボール同士を打ち鳴らす、
- ・壁面遊具のひもをひっぱる
- ・ミルク缶の底面を上にし、両手でたたく
- ・箱を押す、箱の中に入る、出る、箱から箱へ移動する
- ・ボウルの底を上側にして押す
- ・押し車にまたがり、足で蹴って進む
- ・ボールを投げる・追いかける
- ・笛をふく
- ・保育士と絵本をみる、絵本の絵に注目し、指さす、絵本を広げる、ページをめくる、絵本の絵をつまんで食べる真似をする
- ・布を広げて上下に振る、顔にかける、布で顔をかくしてないないばあをする
- ・保育士とふれあい遊びをする
- ・保育士や友達とボールや筒、バッグなどのものを渡す、受け取るのやりとりをする
- ・保育士とミルク缶やボールを転がし合う
- ・食べ物のおもちゃを口に近づけ、食べる真似をする
- ・手提げバッグを腕にかけて歩く、手提げバックを持って四つ這いで移動する

考察

午前と午後の乳児の遊びの実態を明らかにすることを目的に観察調査を行った結果、近藤ら（2012）と同様に、保育室内には、ほふく児や歩行児が混在し、遊んでいる乳児がいる時間帯に睡眠や食事をしている乳児がいることが明らかになった。これは、乳児一人ひとりの生活リズムに合わせて、乳児の生理的欲求充足を重点とした保育が行われていることを示唆している。

また、村上ら（2008）が指摘しているように、乳児は保育士を安心できる存在とし、保育士を基点として活動していた。乳児が遊びに向かい探索する際は、四つ這い、つかまり立ち、つたい歩き等、もの等の環境に合わせて姿勢変換していた。

午前中と午後の遊びとしては、ものをなめる、つかむ、投げる、引っ張る、振るなどの行為や、容器を使いチェーン等を入れたり出したりする遊び、絵本の絵に注目しながらみる遊びをしていた。また、箱の中に入る、出る、ものを押す、引く、押し歩くという重心移動をする遊びをしていた。保育士とのふれあい遊びや、友達におもちゃを渡すやりとりもあり、人と関わる楽しさを感じ、仲間を意識している姿もみられた。さらに、食べる真似やバッグを持って出かける等の再現遊びもあり、乳児が様々な遊びをしていることが明らかになった。

本研究では、午前中、午後の遊びの大きな違いを取り上げることはできなかった。生理的欲求充足、特定の大人との愛着関係により遊びに向かう乳児にとって、遊びの深まる時間は午前午後と明確にできるものではなく、遊びが深まる時間帯は乳児それぞれにあると考えられる。

また、0歳児クラスの低月齢児に関して午前中と午後での遊びについて検討したが、今後、ほふくや歩き始めの乳児だけでなく、主な移動を歩行で行う高月齢児の遊びの時間を踏まえた検討が必要であろう。

引用文献

- 1) 江尻桂子 (2008). 母子相互作用の不思議 内田伸子 (編) よくわかる乳幼児心理学. ミネルヴァ書房, pp.44-47.
- 2) 伊藤美保子・西隆太郎・宗高弘子 (2017). 乳児期の遊び環境と保育者のかかわり—0歳児クラスの観察から— ノートルダム清心女子大学紀要 人間生活学 児童学 食品栄養学編, **41** (1), 68-77.
- 3) カルマール良子 (2017). 乳児のはいはいに関する調査報告 発育発達研究, **76**, 1-7.
- 4) 近藤ふみ・定行まり子 (2012). 一年を通した0歳児の発達と保育室の使われ方の関係 日本女子大学紀要家政学部, **59**, 51-59.
- 5) 厚生労働省 (2008). 保育所保育指針. 森上史朗 (監) (2017) 最新保育資料集 ミネルヴァ書房, pp.392-393.
- 6) 村上博文・汐見稔幸・志村洋子・松永静子・保坂佳一・富山大士 (2008). 乳児保育室の空間構成と保育及び子どもの行動の変化—「活動空間」に注目して— こども環境学研究, **3** (3), 28-33.
- 7) 根ヶ山光一・星三和子・土谷みち子・松永静子・汐見稔幸 (2005). 保育園0歳児クラスにおける乳児の泣き—保育士による観察記録を手がかりに— 保育学研究, **43** (2), 179-186.
- 8) 中野由美子 (2016). 遊び 谷田貝公昭 (編) 新版・保育用語辞典. 一藝社, pp.5.

謝辞

調査にご協力いただきました保育園の諸先生方ならびに園児のみなさまに心より感謝申し上げます。